

## 1

## ペラグラ 第4報

——イタリアにおけるペラグラ禍の発生から終焉まで——

伊藤 泰広

トヨタ記念病院 脳神経内科

**【背景・目的】** 演者は、ペラグラの歴史と現代における課題を過去3回にわたり検証し、かつて風土病として蔓延した状況とは異なる臨床像で、ペラグラは現代でも存在することを、自験例を含め報告してきた。今回はヨーロッパ、特にイタリアでのペラグラ発生と終焉を社会的側面から、また同国のペラグラ研究の成果と誤謬を医学的側面から検証する。

**【方法】** 文献に依った。

**【結果】** ペラグラ (pellagra) が、イタリア語 (pelle : 皮膚 + agrā : 荒れた, 痛い) に由来するように、本疾患は18世紀から特にイタリア北部の農民の間に蔓延した。北イタリアでは元来、挽いた穀物を水や牛乳で煮たお粥 (puls) で食する習慣・文化があり、それが郷土料理ポレンタ (Polenta) である。挽く穀物は、従来はスペルト小麦や黍、クリの実などが主だったが、15世紀に新大陸から生産性の高いトウモロコシが導入され、16世紀以降、ポレンタの主材料はトウモロコシに取って代られた。また特に北部河川平野地域が集約農業に適しており、パンの原料となる小麦はトウモロコシのほぼ倍の価格で商品作物として市場向けに栽培された。トウモロコシを主食とする当地域の貧農の間でペラグラが発生、蔓延し、特に若年女性の罹患率・死亡率の高さが深刻となる。イタリア医師の間でその原因究明と対策確立は重要課題となり、一時イタリアは、ペラグラ学としてその研究で世界をリードし、ペラグラ専用病棟も確保された。イタリアでは2つの学説が論争を繰り広げた。一つは、現在は正説と判明している栄養欠乏説で、19世紀初頭に提唱され、トウモロコシ主体の食事で未解明の因子が欠乏し、発症する説である。栄養欠乏説は、これを裏付ける実験的証拠を提供できない弱点があった上、農民の貧困と、その状況に農民を貶めている社会構造を問題とし、ペラグラを「malattia del padrone」(雇い主に起因する病気) とも称したが、これには社会の支配階層が抵抗した。もう一方は「毒素説」で Balardini により提唱され、その後、高名な精神科医、犯罪学者、人類学者 Cesare Lombroso により主流の学説となる。「毒素説」は、カビで腐敗したトウモロコシで生成された有毒物質でペラグラが発症するとする説で、汚染トウモロコシの除去で根絶可能とした。この説は社会的に支配階層にも受け入れやすく、1902年イタリア議会は「ペラグラ対策法」を可決し、劣化トウモロコシ生産者への制裁、パン焼き共同オープン設置、児童への学校給食義務化などの施策で、ペラグラ減少に一定の成果を上げた。また1870年代に始まる農業機械化と肥料導入といった農業革命の成果で食物生産性が増加し、食物価格が20世紀初頭から低下したことで、農民もより多様な食物を摂取出来るようになった。さらに近代工業の発達で都市労働者として、あるいはアメリカ移民として、農民が流出することで農業人口が減少し、残留農民たちに土地の再分配と生活水準の改善をもたらし、農民の地位が向上したことがペラグラ減少を後押し、1950年代にはペラグラはイタリアから消退する。

**【結語】** イタリア北部でのペラグラの発生から終焉にも同国の文化、産業、社会の歴史の変遷が深く関わっている。